

キンタロウの成長について

最近、キンタロウの体の小ささを心配するお声をよく頂きます。

確かに、キンタロウは他の生後6カ月のゴリラに比べると小さいです。私たちも、生後数か月のころから彼の体の小ささについては心配し、注意して見るようにしてきました。ただ、現在、彼を見ている中で特に健康に異常があるような様子は見られません。ゲンキは一生懸命子育てしており、キンタロウは小さいですが、しっかりゲンキの体に自力で捕まる力があります。梁に上ったり下りたりするときには、ゲンキは両手をキンタロウから離しますが、キンタロウが落ちそうになっているのは見たことがありません。いつもしっかり捕まっています。

今回は、現状私たちがキンタロウの成長について考えていることをお伝えしようと思います。

キンタロウの体が小さい原因は、いくつか可能性があると思っています。

まずは、元々体が小さいまたは成長が遅い個体である可能性です。兄のゲンタロウは、初めの10ヶ月半は人工哺育で育ち、栄養状態も非常に良かったはずですが、それまでの当園の人工哺育で育った個体に比べるとかなり体重も軽かったそうです。そして、現在も7歳のオスのゴリラとしては、体格も（おそらく精神的にも）幼く、体重も軽いです。でも、皆さんもご存じの通り、ゲンタロウはとてもやんちゃで元気いっぱい、健康上は何の問題もありません。ただ、普通よりちょっとゆっくり成長しているだけなのです。

ヒトと同じように、ゴリラにも個体差があります。大きいゴリラもいれば、小さいゴリラもいて当たり前なのです。

次に皆さんが気にされている、ゲンキのお乳の問題です。一見、ゲンキの乳房は平らに見え、全くお乳が出ていないのではと心配になるかもしれませんが、妊娠前のゲンキの乳房に比べれば、今の状態でも以前よりは大きいと思いますし、乳房が大きければたくさん母乳が出るというわけではありません。何より、キンタロウは毎日よくお乳を飲んでいきます。全くお乳が出ていなければ、赤ちゃんはお乳を吸いません。そして、ゲンキが担当者の側で授乳しているときは、チュッチュッと授乳音がしています。

授乳の量までは残念ながら把握できませんが、今のところキンタロウが弱っている様子も見られませんので、極端に少ないということはないと判断しています。

そして、最後はゲンキの育て方です。ゴリラの母親は生後2~3ヶ月くらいから赤ちゃんを地面に置き始め、赤ちゃんは這ったり歩いたりし始めることが多いです。しかし、ゲンキは、

キンタロウが生後半を迎えようとしている現在でも、まだ一度もキンタロウを手放しません。なので、キンタロウはまだ一度も這ったり歩いたりしたことはありません。さらに一日の大半を抱いているキンタロウの体を片手で支えて過ごしています。これにより、彼の体の筋肉等の発達が遅れ、体格の小ささにつながっている可能性があります。現状では、この影響が一番大きいのではと考えています。

出産後のゲンキの子育ての様子から、キンタロウをゲンキが離すのは、普通より遅くなるだろうことは予想していました。しかし、私たちの予想以上に遅れていることも事実です。

効果がどれほどあるかは不明ですが、出産前から、ゲンキの母乳の出が良くなるようにハーブティーを与えてきました。また、以前から、柵越しでキンタロウにリンゴなどの食べ物を与えるように努力しています。(キンタロウはすでに歯も生えてきており、多少の固形物は食べられる体になっています。)ただ、エサを与えながらもゲンキのガードは固く、キンタロウがうまくこちらを向いているタイミングで口元に食べ物を持って行って食べさせることは非常に難しいです。何度か口に少し入る程度には成功しましたが、なかなかうまくいきません。現在もやり方を日々試行錯誤しながら、取り組んでいる途中です。

さらに、ゲンキをやんちゃなゲンタロウや、モモタロウから離し、キンタロウと二人きりでゆっくり過ごさせることも考えています。ゴリラたちをグラウンドに出している状態で、ゲンキだけを分離することは難しいのですが、雨の日や工事等の関係でゴリラたちが日中も室内で過ごすこともあります。そのような機会に、日中、ゲンキがキンタロウとゆっくりできる時間を作り、キンタロウを地面におろすのを促すことができればと考えています。もちろん、ゴリラたちの反応を見ながらの実施になるため、ゲンキが分けられることを嫌がればやりません。

キンタロウを人工哺育にして、私たちがミルクや食べ物をあげればよいと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、母親からコドモを取り上げることは絶対に簡単にはいけないことです。

もし、キンタロウをゲンキから取り上げるとなると、ゲンキに麻酔をかけることとなります。麻酔をかけることは、母子ともに、身体的にも精神的にもかなりのリスクがあります。また、ゲンキの場合、これまでの彼女の行動から、一度人工哺育になったキンタロウを何か月後かに受け入れない可能性は低いとは思いますが、可能性はゼロではないです。これらのリスクを冒してでも、やらなければいけないと判断したとき(キンタロウが明らかに衰弱しているなどの場合)にしか、人工哺育の決断はできません。

少なくとも、キンタロウがお乳を飲み、ゲンキにしっかりつかまっている現状では、私たちにできることは、キンタロウを注意深く観察することと共に、上に挙げたゲンキの母乳の出

の促進、キンタロウへの給餌による栄養の補給、ゲンキがより落ち着く、キンタロウを手放しやすい環境の提供だと思っています。

まもなく国際環境エンリッチメント会議が行われ、海外のゴリラ関係者の方も当園に来園されます。私が昨年参加した、国際ゴリラワークショップで知り合いになった方も来られますので、ご意見やアドバイスをいただきたいと思っています。

ゲンキは人工哺育から返されたゲンタロウを立派に育てています。腕や背中でコドモを運ぶこと、地面に下ろして傍で遊ばせることも知っています。自分もそうやって、母親のヒロミに育てられてきました。

体の大きさもそうですが、母親の子育てにも個体差があります。私たちは、ゲンキがきちんとキンタロウを育ててくれることを信じて、私たちにできる限りのサポートを考え、実行しながら、彼らの様子を見守っていきたいと思っています。

皆様にも、キンタロウがこれからも健康にゴリラらしく成長していくことを祈りながら、見守って頂けると嬉しいです。

ゴリラ担当 安井